仙台大学紀要
1999, Vol. 30, No. 2, pp. 84-92

近代スポーツとナショナリズムに関する一考察
――映画の描くスポーツ世界に注目して――

坂 根 治 美

A study on modern sport and nationalism
――An attempt to analyse a sports movie――

Osami Sakane

The aim of this paper is to analyse a sports movie "Chariots of Fire" from a viewpoint of nationalism of Scotland and to consider the relationship between the revitalization of nationalism and the movie which portrays modern sport world.

This movie was made in 1981 and deals with the world of sport around 1920 (1919～1924), both of these two periods were the days of revitalization of Scotland nationalism.

Although this movie contains many scenes which promote England nationalism, this movie also weaves images of Scotland nationalism which relativise England nationalism. Furthermore, reflecting the relativization of nation in sport, this movie portrays sport by relativising nationalism sport.

Key words: modern sport, nationalism, sports movie

1. はじめに

本論文では，多くの論者が様々な視点から分析・批評している映画『炎のランナー』をとりあげて，作品とナショナリズムの関係について考察してみたい。

ナショナリズムの復活が喧伝される状況にあって，吉野は消費社会のツアリズムや異文化マニュアルとナショナリズムの関係を分析している[1]が，こうした現代社会におけるナショナリズムとの関係で映画という一つの表現手段が持つ意味を検討することが本論の課題である。

映画とナショナリズムといえば歴史社会学の代表的研究の一つとしてクラカウアーの『カリガリからヒトラーへ』[2]が思い起こされるが，そのヒトラーがレニ・リーフェンシュタールに命じて制作させた映画『オリンピア』(『民族の祭典』と『美の祭典』の2部構成）は，スポーツ映画を利用してのナショナリズムの高揚を意図したものであったといわれている。それに対して『炎のランナー』は英国の2人の陸上競技のオリンピック選手を描いた作品であるが，一方の主人公エーブラハムズのユダヤ人問題と他方の主人公リデルの宗教の問題が中心的なモチーフであると理解されており，英国のナショナリズムの高揚そのものを目的とする映画であったとは考えられてはいない。しかし，この映画は制作された1981年に英国王室の天覧興行作品にも選ばれ，大人気を博したといわれるように,「いたるところに古きよき時代の愛国主義が蔓延している」映画であった[3]。そしてアメリカ，イギリス両国のアカデミー賞を受賞しているのである。

このように英国のナショナリズムに訴える作

品でもあると考えられている『炎のランナー』であるが，その場合一般に指摘されているのは英国あるいはそこで中心的な位置を占めるイングランドをめぐるナショナリズムとの関係である。イングランド，ウェールズ，スコットランド，アイルランドというネーションの連合体としての英国であるが，本論では一方の主人公エリック・リデルの故郷スコットランドのナショナリズムに注目してこの映画の考察をしてみたい。そもそもこの映画のプロデューサーのデイヴィッド・プットナムは主人公の二人の選手のうちリデルの伝記に感動して制作を決意したという[4]が，そうした視点でこの映画の内容を分析してみることで，近代スポーツを扱った映画が現実のナショナリズムの復活という状況といかなる関係を有しているかという問題の一端に迫ってみたい[5]。

舛本によれば，映画の分析においてそのテクストは，① 演じられるスポーツのテクストが構成される当時の状況，② 制作された当時の状況，③ 鑑賞や解釈される時代の状況，という三重のコンテクストに応じて解釈される必要がある[6]。本論ではこの三つの状況を考慮に入れながら分析を試みることになる。

2. 『炎のランナー』におけるスコットランド・ナショナリズム

確かにこの映画をみるときに，英国あるいはその中心のイングランドの素朴なナショナリズムを高揚させるような具体的な場面が連続していることに気づくのであり，上述のようなイギリス国内における映画の成功もこのことが大きな要因となっていることは間違いないであろう。この映画が制作された1981年当時はオイル・ショックの影響もあり，英国経済の衰退の時期であったが，そういう時代状況の中で貴族主義，ブルジョア主義を色濃く打ち出したこの作品は，大英帝国の過去の栄光を想起させる作品として英国で熱狂的に迎えられたのである[7]。

英国を象徴する古い大学であるケンブリッジ大学の裕福な学生たちが陸上競技で活躍する場面，それを報道する新聞記事，イギリス人であることを称揚する歌「彼こそイギリス人」の合唱（ここで歌詞の 'Englishman' に注目したい。あくまでもこれはイングランド England を称える歌である）といった場面はまさにそうした素朴なナショナリズムを刺激するものであり，エーブラハムズがパリ・オリンピックの 100 m で優勝したときにユニオン・ジャックが翻り，コーチのマサビーニの待つホテルに英国国歌が聞こえてくる場面はそのクライマックスといってよいだろう[8]。

しかし，ここでは同時に非常に抑制されたかたちではあれスコットランドのナショナリティを理想化するような描写もまた織り込まれていることによって，この映画はかえってイングランド・ナショナリズムを相対化あるいは貶価するような側面を有しているというのが本論の筆者の視点である。

その一例として，映画の最後の部分に注目しよう。エリック・リデルの死に際して「全スコットランドが喪に服す」と字幕で示されるということが持つ意味は大きい。スコットランドの人々の抱くナショナルなヒーローとしてのリデルのイメージがここに示されることになる。さらに彼の死が，第二次世界大戦中の中国における日本軍の捕虜収容所においてであったことは，ナショナリズムの極限的な表現である戦争の犠牲者としての彼を強烈に印象づけることにもなるのである。

この映画が直接に扱うのは1919年から1924年のパリ・オリンピックまでの5年間であるが，以下，作品の展開に従ってスコットランド・ナショナリズムに関わるいくつかの場面について考えてみたい。

スコットランドの英雄エリック・リデルがこの映画に最初に登場するのは，父親の故郷であるスコットランドのハイランド地方の村で行わ

れている運動会の場面である。「このヒースの丘や山々。何にも代えがたい土地です。温かい歓迎，ありがとう。自分がスコットランド人である事を実感させて下さったみなさんに感謝します」と村人に語るエディンバラ大学の学生リデルは父親の布教地中国の生まれであるが，ラグビーのスコットランド代表チームの名ウィングである。そのリデルの最初の描写が，ゲール語が使用されるなどスコットランドの文化が比較的多く残存しているといわれるハイランド[9]を背景にしていることは意味があろう。また，この運動会のシーンではキルトを身につけた人物が描かれ，バグパイプの音も聞こえている。スコットランドの民族衣装キルトやバグパイプは，イングランドやアイルランドに対抗して自らの象徴を持つ必要から18〜19世紀に「創造」された「伝統」であるといわれている[10]。スコットランド人リデルを強調する映像である。

映画ではこのあと，スコットランド対アイルランドの陸上競技大会のシーン，スコットランド対フランスの競技会のシーンを経て，エリックとエーブラハムズのロンドンでの対決のシーンへとつながるが，スコットランドとアイルランドの対抗戦のポスターが「国際陸上競技大会」と謳うように，スコットランドは一つのネーションである[11]ということが明確に示されているのである。イングランドのエーブラハムズとの対戦で勝利するリデル，あるいはのちのパリ・オリンピック期間中に初めて英国皇太子に会ったときに，皇太子が「君に2度もトライを取られた。今度は味方で良かった」と語るようにラグビーでもイングランドに対抗していたリデルの原点はあくまでもスコットランドである。そして，エーブラハムズがプロのコーチにつき，当時としては最新のトレーニングを重ねている映像に対し，スコットランドの山々や海岸を走り回るリデルの練習法を描く映像はそのことを象徴的に示している。

実際のリデルは新聞のインタヴューに答えて，「昔，スコットランド人は度々，イングランド人を襲撃しては，急いで逃げ帰っていた。その逃げ足の速さを私が受け継いだのだろう」と語っている[12]。彼がスコットランド人であるという強い意識を持っていること，イングランド人への対抗意識を持っていることを示すエピソードである。

そのリデルと家族が布教活動に熱心に取り組んでいるのはプロテスタントのスコットランド教会である。この教会はきわめて民主的な長老制度を持ち長老派教会とも呼ばれ，スコットランド独特の国教的な存在である[13]。そうした宗教を熱心に信仰するリデルが直面したのがいわゆる「安息日」の問題であった。オリンピック出場を決めたリデルであったが，100 m の予選が日曜日となったことで彼は主の定め賜うた安息の日には走れないと棄権を申し出ることになる。メダルを期待できるリデルに対して英国の皇太子，選手団長やオリンピック委員会の幹部たちは国家への忠誠という論理で説得する。「君も私も英国民として生まれた。同じ民族，伝統，絆，忠誠心を分かち合っている。ときには忠誠心の名の下に犠牲を強いられる。犠牲なくしては忠誠心はありえない。君にとって今がそのときだ」と説得する皇太子に対して，リデルは「祖国を愛しています。だが，このことだけは……」と譲らない。

ここで注目したいのは，両人とも英国というものを自らの国家であると認識していることである。その限りでは上述のようにこの場面は英国ナショナリズムの問題を扱ったものである。オリンピックの英国選手団のメンバーという立場に立てば当然抱くべき国家意識であろう。しかし，リデルがこだわったスコットランド教会の教えは，人間の救済と滅びは一切神の意志に帰すというもので[14]，これは英国あるいはその中心のイングランドという存在を相対化するものとして機能することになるのである。

そして，この場面以降リデルの「勝利」が続くことになる。まず，自分の信念を押し通して100 m を棄権し，チームメートから譲られた

400 m に出場することが認められること。その400 m では世界新記録を出して優勝すること。100 m で優勝しても虚しさしか感じられないエーブラハムズと，信念を貫いての優勝に心からの喜びを爆発させるリデルの表情の対照。それまでの場面でのリデルとエーブラハムズの描写が，控えめで実直なリデルに対して野心家のエーブラハムズというパターンによっていただけに優勝の場面での両者の対照がいっそう際だっているといって良いだろう。ここに，真の勝利者は「フライング・スコッツ（天翔るスコットランド人）」の愛称で呼ばれたリデル[15]の方だったというメッセージを読みとることもできるのではないだろうか。

本論の筆者が特にそういう視点でこの映画をみたいと考えるのは次のようなことも関係している。リデルの説得にあたった皇太子はのちに即位してエドワード 8 世となるもののパリ・オリンピックの 12 年後の 1936 年に退位していることである。アメリカ人の離婚経験のある女性との恋と国王としての国家への義務の間で悩んだ彼は，結局一人の外国人女性のために国王の地位を捨てたのである。退位にあたって彼は次のようにラジオで演説している。

「私がこれから述べることを，諸君に信じてもらわねばならない。私には，私が愛する女性の助力と支持なしには，国王として私が望むように，重い責任を負い，もろもろの義務を果たすのが不可能であるのを悟った。そして，いま，われわれ全員は，新しい国王を戴くことになる」[16]

ここでも国家への義務という言葉は使われてはいるものの，こうした皇太子がリデルに「国家への忠誠」を説くことは事情を知る後世の映画の観客にとって白々しいものとしか映らない。あの説得のシーンは英国ナショナリズムというものを貶価し，映画を観る者が，スポーツはナショナリズムに弄ばれるべきではないという「イメージ」を強化する場面であったと考えることもできるのである。

3. スコットランド・ナショナリズムにおける『炎のランナー』

前節では映画『炎のランナー』に描かれたスコットランド・ナショナリズムに注目してみたが，次にスコットランド・ナショナリズムの動きの中にこの映画がどう位置づけられるかという点を考えてみたい。

まず，映画が描いた 1920 年代の状況をみておこう。

笠間によれば，スコットランドは 20 世紀の初頭まで連合王国の帝国主義政策に積極的に貢献してきた。石炭を初めとする天然資源に恵まれたスコットランドでは鉄鋼，造船，機械などの重工業が発展し，またスコットランド人は連合王国軍隊への入隊率も高かった。しかし，第一次世界大戦後に重工業中心の経済に翳りがみえだすとこうした連合王国との協力体制も徐々に熱気を失い，経済の多様化に乗り遅れたスコットランドでは，のちにナショナリズム運動において中心的役割を果たすスコットランド国民党(SNP) が 1934 年に結成されるなど，1920 年代から 30 年代は組織的なナショナリズムの運動がみられた時期であり[17]，また，当時はスコットランドの文芸復興の時代でもあったのである[18]。このようにイギリスが衰退過程にあり，スコットランドの民族運動が激化する第一次大戦後の時期[19]を描いたのがこの映画であったのである。

この映画の制作された 1981 年当時の状況はどうであろうか。

1970 年代は，それまで必ずしも活発とはいえない状況になっていたスコットランド・ナショナリズムの覚醒期であった[20]。1970 年に発見された北海油田の領有を主張し，スコットランドの分離・独立をちらつかせながら中央政府と対決するスコットランド国民党[21]の国政選挙に

おけるスコットランドでの得票状況をみると，1967年まで泡沫政党に過ぎなかった同党は，1970年の総選挙で11.4%(1議席)，1974年2月に21.9%（7議席），同年10月に30.4%（11議席）と急速に支持を伸ばした。しかし，1979年5月の総選挙では得票率は半減して2名当選にとどまり，この選挙によりサッチャー政権が成立した。政治の面でみるとスコットランドのナショナリズムの火は消えたかに見えたが，1980年代に入ると文化の面でのナショナリズムの高まりが見られるようになる。スコットランドの大学におけるスコットランド（史）研究の飛躍，ゲール語あるいはスコットランド・アクセントの英語によるポピュラー音楽の人気の高まり，スコットランド社会を描く文学に対する高い評価といったように，各分野でのスコットランド文化のリバイバルが起こったのである[22]。

映画『炎のランナー』は，このようにサッチャーが政権をとり，政治面でのスコットランド・ナショナリズムが衰退し，やがて文化の面でのスコットランド・ナショナリズムが勃興していく時期である1981年に制作されたのである。サッチャー首相は中央集権をめざし，「それまで隠されていたイングランド・ナショナリズムをイギリス社会の中央に引き出した」[23] といわれる政治家であり，このように国家の多数派のナショナル・アイデンティティの押しつけがあった場合には，少数派のナショナル・アイデンティティが鮮明に意識される傾向がみられるという[24] が，1981年とはまさにスコットランド・ナショナリズムがそうした状況にあった時期ととらえることができるだろう。

スコットランドの独自性を維持・促進してきたものとして，長老派のスコットランド教会，イングランドのコモン・ローよりもローマ法に近いスコッツ・ロー，イングランドよりも平等な教育制度，独自の紙幣発行権を有する銀行制度や，これらの制度により培われてきた平等主義，実際主義，教育への敬意，集団志向等の価値が挙げられ，スコットランドはイングランドよりも移民に対しても寛容であるといわれている[25]。この映画は，ユダヤ人差別の問題と英国社会での立身出世を意識するエーブラハムズがその問題に非常に個人主義的に対処する状況に対する，スコットランドのこうした価値観からの批判が込められたものであると考えることもできるのではないだろうか。

ところで，イギリスという国家に対するアイデンティティについて，一條は次のような立場があると述べている。つまり，イギリス・アイデンティティとは4つのネイションが集まった連合王国という国家および諸制度に対する愛着であり，帝国の拡大と戦争という非常時を切り抜けるために創り出され，王室を主要なシンボルとする「疑似ナショナル・アイデンティティ」に過ぎない，という立場である[26]。映画が扱ったのは第一次大戦直後の時期であり，エーブラハムズの大学入学時に学寮長がその戦没者について語るシーンはまさにこうしたイギリス・アイデンティティを直接に描いたものであるし，国別対抗としてのオリンピックもシンボルである王室（皇太子）を全面に出して描かれることになる。ユニフォーム姿（英国選手団長が選手たちに対する激励で特に言及していることに注目したい）による開会式の入場行進のシーンの国旗や国歌，あるいは競技場の貴賓席にならぶ来賓達の姿などによって素朴なナショナリズムを高揚させるオリンピックの雰囲気が描き出されている[27]。また，安息日の問題に関連して開催国フランスとの第一次大戦中の同盟関係に言及されるし，逆に国家のプライドからフランスに頭を下げることはできないといった発言もナショナリズムを考える上で重要な意味を持つことになる。しかし，傲慢であると言ってリデルを説得する英国選手団の幹部たちに対するリデルの答えは，個人の信仰に対して他人や国家が口をはさむことこそ傲慢であるというものであった。

リデルの優勝の場面には，国旗も国歌も金メダルも出てこない。チームメートに担がれて喜

びを表すリデルの姿にかぶせて,「第1位エリック・リデル 英国 47秒6 世界新記録」というアナウンスが流れるのみである[28]。国旗が翻り,国歌が流れ,金メダルをバッグにしまうエーブラハムズが描かれるシーンと比べてみるとき,リデルの勝利のシーンによってイングランド・ナショナリズムは相対化もしくは無化されたととらえることができるのではないだろうか。

前述のように当時はスコットランドのナショナリズムが勃興していく時期でもあったし,さらにこの映画が制作された時期も再び同じ様な状況を迎えていたのであるが,『炎のランナー』はそうした時代を扱い,そうした時代に作られた,スコットランド・ナショナリズムを周到に意識した映画であったと考えられるのである。

武部はスコットランドも含めてのケルト諸国の映画について次のように語っている。

「(前略)ケルト諸国の映画を通して観れば,四つのキーワードで括れそうな気がする。「自由を求める気風」,「絶対に屈しない頑強さと反骨精神」,「最後まで貫き通す信念」,「限りないロマン」。私たちの心の琴線に触れる何かがそれらの映画から感じられる」[29]

『炎のランナー』におけるエリック・リデルの描写の仕方に注目するときに,まさに武部が指摘する4つのキーワードがそのままこの映画のモチーフとしてとらえられるのではないかと思われるほどである。つまり,ケルト(スコットランド)の英雄リデルをケルト映画のオーソドックスな枠組みで描いたのがこの映画だとも考えられるのである。

4. まとめ

それでは,この映画はイングランド・ナショナリズムに対抗させるかたちでスコットランド・ナショナリズムを描こうとしたものかといえば,そうではないであろう。

リデルはオリンピック優勝後スコットランドへ凱旋し,スコットランドの人々と喜びを分かち合った[30]。映画には描かれないが,スコットランドのナショナルなヒーローとしてのリデルという図式の完成である。しかし,リデルはスコットランドへ凱旋すると選手生活からの引退を宣言し,当初の計画どおり翌年には宣教師として中国に赴くことになる[31]。英国のナショナリズム・スポーツを拒否して100mを棄権した彼にとって,スポーツはあくまでも神に仕える者としての彼個人のものでしかなかったのである。そうしたリデルの生き方を描くことで,スコットランドのナショナリズム・スポーツもまた相対化されたと理解できるのではないだろうか。100mの予選が行われた日曜日にパリのスコットランド教会でリデルが説教するのは,「すべての国々も主の前では無に帰し,主にとっては虚しく形のないもの」という内容のイザヤ書の第40章であった[32]。舛本によればこのシーンは制作側の意図に基づく脚色であるとされる[33]が,ナショナリズムそのものを無化するシーンととらえてよいだろう。リデルの人生はナショナリズムに翻弄されたものではあったが,彼の優勝シーンはナショナリズムを超越した個人の信念の勝利を理想的に描いたものととらえることもできるのではないだろうか。

このようにみてくると,この映画は表面上は英国あるいはイングランドのナショナリズムを高揚させる映像を豊富に使いながらも,それを相対化するようなスコットランド・ナショナリズムを意識した映像を周到に織り込み,さらにはナショナリズム・スポーツそのものをも相対化するような視線によってスポーツが描かれた作品であったと考えられるのである。

スポーツはナショナリズムを高揚させるものであると同時に,国家というものを相対化するものでもある[34]。多木が述べるように,自らを評価してくれるチームを求めて国境を越えるのが当たり前になっているサッカー選手や,個人として世界中のトーナメントを転戦するテニス選

手などはその国家の相対化を象徴する存在であろう[35]。こうしたスポーツにおけるナショナリズムの相対化を扱った一面を持つと考えられる『炎のランナー』が英国で熱狂的に受け入れられたことを考えるとき，オリンピックを舞台とする自国の選手の活躍を描くこの映画は，かつての栄光を回顧する英国民の素朴なナショナリズムに訴えたということになるのだろうが，この問題に関してはレイシズムあるいはレイシャリズムの観点も見落としてはならないだろう。

この映画をみるときに人々がすぐに気づくのは，オリンピックの場における白人の圧倒的優勢であろう。当時のオリンピックは完全に上・中流白人ブルジョア社会だけのものだったのである[36]。陸上競技も例外ではなく，この映画に登場する黒人選手はアメリカ選手団の練習シーンにおける走り幅跳び選手のほかにはほとんどいない。つまり，当時のオリンピックの状況を客観的に描くことはそのまま白人優勢の社会の状況を描くことに他ならなかったのである。

英国では第二次大戦後NCWP（新コモンウェルス諸国およびパキスタン）からの移民が増加し，彼らの雇用や居住地が大きな社会問題となっていた。そうした状況は自らの雇用や居住地といった生活の根本的問題に影響を及ぼすものとして白人労働者にとっても無関係ではなく，彼らにとってこれら第三世界からの非白人移民はいらだちの種となっていくのである。英国特にイングランドにおけるレイシズムあるいはレイシャリズムが高まるのが1960年代から70年代にかけてであった[37]。そして，この映画の制作された1981年には失業率が労働人口の12%（300万人）にまで達していたのである[38]。そうした時期に公開されたこの映画の英国における人気の背景として，こうした白人の人種感情があったことも考慮すべきであろう[39]。彼らにとっては，自らを選ばれた人間であると意識する2人の白人英国青年の活躍を描くこの映画は，素朴なナショナリズムの意識およびそれと融合する現実的な人種の意識をも刺激し，自己のアイデンティティを再確認する格好の機会を提供してくれる作品であったと考えられるのである[40]。

註

1) 吉野耕作「民族理論の展開と課題―『民族の復活』に直面して―」『社会学評論』第37巻第4号1987年，同「消費社会におけるエスニシティとナショナリズム―日本とイギリスの『文化産業』を中心に―」『社会学評論』第44巻第4号1994年，同「ナショナリズムの社会理論」梶田孝道編著『国際社会学―国家を超える現象をどうとらえるか―』（第2版）名古屋大学出版会 1996年，吉野耕作『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会1997年。
2) ジークフリート・クラカウアー『カリガリからヒトラーへ―ドイツ映画1918-1933年における集団心理と構造分析―』丸尾定訳みすず書房1971年。
3) Ronald Bergan, Sport in the movies, Proteus : New York, 1982，舛本直文「スポーツ映像文化の解釈学覚書：『炎のランナー』を事例として」『東京都立大学体育学研究』第17号1992年p. 21に引用。
4) 滋野辰彦「炎のランナー」『ヨーロッパ映画200』キネマ旬報社1984年p. 408。
5) こうしたイングランドとスコットランドのナショナリズムとスポーツについて，たとえば梶田は，「ヨーロッパで最も人気のあるスポーツであるサッカーやラグビーは，イギリス（UK）としてではなく，イングランド，スコットランド，ウェールズという地域（民族）ごとにチームの編成がなされ，こうしたスポーツ自体がナショナリズムの発露となっている。」と述べている。梶田孝道『統合と分裂のヨーロッパ―EC・国家・民族―』岩波書店1993年p. 69。
6) 舛本前掲論文p. 23。
7) 同上。
8) エーブラハムズの優勝をめぐって注目したい点をこのほかにもいくつか挙げておく。100mの決勝のシーンでスタート地点に向かう選手達の後ろのフェンスに黄色いリプトン紅茶の広告旗がかかっている。エーブラハムズは大英帝国の栄光を象徴する商標を背負ってゴールに向かっ

たのである。また3位に入ったニュージーランドのアーサー・ポリット選手（映画の中ではオックスフォード大学留学中として皇太子に紹介されたワトソン選手として描かれていると思われる）はのちに英国王室の専属外科医さらにはニュージーランド総督となる人物で，彼もまさに大英帝国の栄光を担う人物であった。エーブラハムズ自身，4年後のアムステルダム・オリンピックには29歳の若さで英国選手団長として参加しているし，職業の面では弁護士としてまたサンデータイムズ紙の記者としても活躍した。彼は，大英勲章を受章し英国アマチュア運動協会委員長（1968～75年）を務め，亡くなるまでポリット選手との親交が続いた（エーブラハムズ，ポリット両選手の経歴については，小川勝「世界のマルチアスリート」『スポーツニッポン』1997年1月14日～1月18日）。このように英国ナショナリズムを刺激するようなエピソードに満ちていることは確かにこの映画の大きな特徴である。

9) ロザリンド・ミチスン編『スコットランド史―その意義と可能性―』富田理恵・家入葉子訳 未來社 1998年 p. 19，梶田前掲書 1993年 p. 72。
10) 吉野前掲書 1997年 p. 46。
11) 同上書 p. 23。
12) 武部好伸『ケルト映画紀行―名作の舞台を訪ねて―』論創社 1998年 p. 282。
13) 同上書 p. 283。
14) 同上。
15) 出石尚三「炎のランナー特集4 忠実に再現された20年代ファッション」『キネマ旬報』1982年8月上旬号 キネマ旬報社 p. 60。
16) 『時事英語研究』編集部編『音の現代史』研究社出版 1982年 pp. 6～7「エドワード8世，王位を放棄」。
17) 笠間千浪「ナショナリズムとレイシズムの交錯―《ネーション＝ステイト》イギリスの歴史と現実―」梶田孝道編著『国際社会学―国家を超える現象をどうとらえるか―』（第1版）名古屋大学出版会 1992年 pp. 256～257。
18) ミチスン編前掲書 p. 202。
19) 梶田前掲書 1993年 p. 77。
20) 同上書 p. 79。
21) 同上書 p. 80。当時の同党のスローガンは「豊かなスコットランド人か，それとも貧しいイギリス人か」であった。
22) 以上，政治・文化両面のナショナリズムについては，一條都子「現代スコットランドのナショナリズムにおける「ヨーロッパ」の役割」日本国際政治学会編『国際政治』第110号『エスニシティとEU』1995年（以下一條 1995a）有斐閣 pp. 87～90。
23) 一條都子「イギリスの解体？―マルチ・ナショナル国家イギリスとEU―」西川長夫・宮島喬編著『ヨーロッパ統合と文化・民族問題―ポスト国民国家時代の可能性を問う―』人文書院 1995年 pp. 248～249。
24) 一條 1995a p. 87。
25) 同上論文 pp. 94～95。
26) 同上論文 p. 94。
27) こうした国民的な象徴が国民的統一を伝えることはハーグリーブスが指摘している。J. ハーグリーブス著・佐伯聰夫他訳『スポーツ・権力・文化―英国民衆スポーツの歴史社会学―』不昧堂出版 1993年 p. 213。
28) 篠田邦彦「スポーツがかかわる個性化の過程を観る」『体育の科学』vol. 45 no. 7 1995年 p. 570。
29) 武部前掲書 p. 294。この点について武部は，『ブレイブハート』をその最も象徴的な映画として挙げながら，『ライアンの娘』，『ヒア・マイ・ソング』，『ローカル・ヒーロー/夢に生きた男』，『エクスカリバー』，『遥かなる大地へ』，『わが谷は緑なりき』などでもそうした一面が浮き彫りにされているような気がすると述べている。
30) 同上書 p. 286。
31) 同上。
32) 篠田前掲論文 p. 569。
33) 舛本前掲論文 p. 25。
34) 多木浩二『スポーツを考える―身体・資本・ナショナリズム』筑摩書房 1995年 p. 179。
35) 同上書 pp. 184～185。
36) 荻　昌弘「炎のランナー特集1 スポーツ・ドラマを超越した青春神話」前掲『キネマ旬報』pp. 54～55。
37) 笠間前掲論文 pp. 250～259。スコットランドにおいては，NCWP系住民へのレイシャリズムはイングランドと比べて散発的であった。同論文 p. 258。
38) 同上論文 p. 252。
39) 舛本はE.E. Snyderを引用しながら，ノスタルジアとは古き良き時代の肯定的積極的同意と現在の状況が当時のそれと隔絶し，いわば否定的に変化していることへの嘆き，および自分がその改善に関与できない悲嘆の念が混ぜ合わされ

たものであると述べているが(舛本前掲論文 pp. 24～25)，大英帝国の衰退に対するナショナリズム的感情ばかりでなく移民の増加に対するレイシズム，レイシャリズム的感情もこの概念により説明できるのではないかと考えられる。

40) イギリスには「WISE (Welsh, Irish, Scots, English) という 1975 年設立の反 NCWP 団体があるが，そのアイデンティティは「白人のイギリス人」である。笠間前掲論文 p. 265。

本論文は文部省科学研究費補助金(萌芽的研究)「映像によるスポーツ・イメージの形成に関する実証的・理論的研究」(研究代表者：平田　忠)による研究成果の一部である。

(平成 10 年 10 月 30 日受付，平成 10 年 12 月 14 日受理)